

男子
Boys

小平ジュニアが 6年ぶりの栄冠

第32回 若葉カップ

全国小学生大会

7月29日～8月1日 ● 京都府長岡京市・西山公園体育館

各都道府県を代表する小学生のクラブチームが日本一をめざす若葉カップ。6年単、4年単、5年複、6年複、5年単の計5ポイントで争われるチーム戦は、個々の力はもとよりオーダーパターンも含めた総合力がものをいう。今年も男女各48チームが京都に集結。熱戦に次ぐ熱戦を繰り広げた。

(詳報はP72-75、記録はP82)

取材・文/山口奈緒美 写真/江見洋子

バドマガに掲載された/
写真買えます!
詳細は98ページにて



優勝を決めたのは6年複の縄田理玖(右)と橋村優翔。08年から3連覇した強豪が6年ぶりに頂点に返り咲いた。トレーナーや栄養士を招いて体づくりへの取り組みを見直し、「崩れない」チームになった

優勝 小平ジュニア (東京)



予選リーグから一つもゲームを落とさなかった4年単の水谷友弥

**広島安佐
ジュニア**
(広島)

決勝トーナメント1・2
回戦を3-0でクリアし
て、3年ぶりの3位入賞
©日本協会

3位



3位



**岡垣
ジュニア**
(福岡)

昨年3位の強豪・たなしMAXなどを破り、
11年以來の準決勝進出を果たした



準
優勝

長岡京市スポ少
(京都)

開催市代表チームが、男女を通じて初の決勝
進出。ナショナルメンバーの衣川真生(写真)を
中心に、一戦ごとに勢いをつけていった



Tournament Report

第32回若葉カップ 全国小学生大会

7月29日～8月1日 ●京都府長岡京市・西山公園体育館

取材・文／山口奈緒美 写真／江見洋子



5年複で負けなしの6連勝をあげた青木洗明(左)／篠原仙一。頼りになるペアがチームのムードを大いに盛り上げた

優勝 小平ジュニア (東京)



バンザイをして優勝を喜ぶ城戸友行監督(左端)とメンバー

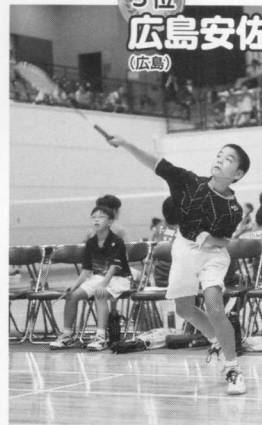
男子
Boys
成長の証。
小平ジュニアが
6年ぶり4度目のV!

準優勝 長岡京市スポ少 (京都)



5年複の菅生一輝(左)と川口聡太は同じコンビで活躍。6年複も合わせ、ダブルスの練習に力を入れてきた成果が表れた

3位 広島安佐ジュニア (広島)



3年ぶりの3位入賞。5年複の日野石未来(写真下・左)／吉岡柊星は全勝で準決勝まで勝ち進んだが、小平ジュニアにはストレートで敗退。同じく準決勝進出に貢献した6年単の森川翔嘩(写真左)も最後は勝利に届かなかった

過去31回の大会の歴史で、3連覇を達成したチームがたった一つある。東京代表の小平ジュニアだ。2008年から10年まで全国のトップに君臨した強豪が、6年ぶりに決勝進出。相手は初めて決勝に駒を進めてきた、地元の長岡京市スポ少だ。

6年単は長岡京市スポ少の衣川真生が圧勝したもの、小平ジュニアは4年単の水谷友弥、5年複の青木洗明／篠原仙一、6年複の縄田理玖／橋村優翔がすべてストレートで勝利。期待を浴びながら勝ち進んできた地元代表の勢いを封じた。

予選リーグから決勝まで、最後の戦いの結果を待つことは一度もなく、危なげない栄冠奪還だったように見えるが、城戸友行監督は首を振る。

「一つ間違ったらどう転ぶかわから





上位の常連だが、3位は5年前に準優勝して以来最高の成績。4年単の斉藤礼(写真上)は長岡京市スポ少との準決勝でも唯一の白星をもたらした。5年後の中野遥翔(写真左・右)／井川宏次郎は、準決勝第2ゲームの追い上げ及ばず

3位

岡垣ジュニア

(福岡)

ベスト8

佐渡ジュニア

(新潟)

昨年に続いてベスト8に名を連ねた。5年複を担ったのは4年生コンビの村上光希(右)／磯部陽向



B

ベスト8

香川スクール

(香川)

U13ジュニアナショナルメンバーの池田真那斗を中心に、一昨年は優勝した強豪だが、名門対決となった小平ジュニアとの準々決勝で敗れた

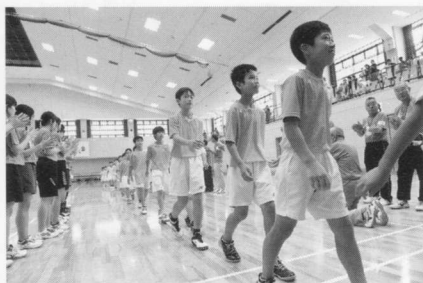


Close-Up

長岡京市スポ少がうれしい準優勝

開催地である長岡京市のチーム、『長岡京市バドミントンスポーツ少年団』には、毎年男女ともに特別の出場枠がある。そして、上位に入賞しようがしまいが、毎年閉会式に強豪チームとともに整列し、最後まで見届ける。しかし、これまでは女子ベスト4、男子はベスト8が最高だった。

地元の期待をひしひしと感じる中、今年は強化に本腰を入れた。市の体育協会からの支援金を利用し、外部コーチを招き、立命館大の選手たちに練習のサポートを依頼。月1回のペースで他府県との合同練習も実施した。優勝はならなかったが、高橋光雄監督は決勝戦後、会場内を歩けば祝福と取材で呼び止められっぱなし。「やっと結果が出せた。支援に少しは恩返しできました」と安堵の表情を浮かべた。



閉会式、胸を張って退場する長岡京市スポ少のメンバー

ベスト8

野々市ジュニア

(石川)



6年単の西村勇汰郎は準々決勝、惜しくもファイナルに持ち込むことはできなかったが、チームは初のベスト8入り

ベスト8

志木ジュニア

(埼玉)



2年連続出場で準々決勝に進出。3年生の木村一輝は4年単で3勝をあげる活躍を見せた

長岡京市スポ少もまた、大学生との定期的な練習という新たな取り組みの中で、高いレベルのシヨットに体を馴染ませていった。大人の懸命のアイデアに対し、綿のような吸収力で応える子どもたち、輝く将来へ向かって、素地は確かにここで培われている。

ないところは、何度かあった」たとえば、香川スクールとの準々決勝、4年単で野村歩夢がファイナル22-20の大接戦を制したあたりは大きな力ギだった。ミスのないプレー、ケガをしない体をめざし、この数カ月はチームにトレーナーを招いて、体幹を鍛えるトレーニングやクールダウンなどを入念に行なってきたという。期待通り、選手たちは「体が崩れなくなった」「前とは違うトレーニングが楽しい」などと口々に話した。